

## 【6】 螺髻梵志の姿形

[0] 次に髪形・衣服など螺髻梵志の姿・形や身だしなみについて調査してみよう。

[1] まず名前の由来となった髪形から調べることにする。

[1-1] ‘jaṭila’ ‘jaṭā’ は「螺髻」のほかに「編髪」「結髪」「長髪」などとも訳される。漢語の「螺」はほら貝に似た「にな」、あるいは巻き貝のようにぐるぐるまいた形のもを意味し、漢語の「髻」は『諸橋大漢和辞典』では、訓は「たぶさ」「わけ」であって、「髪をすべたばねる。また、その髪」という意味が与えられている (p.13241)。また『広辞苑』では「髻」は「髪を頭の頂に束ねた所。また、その髪。たぶさ」とされている。したがって「螺髻」からは伸ばした髪の毛を頭の上で巻き貝のように編み上げた様子が想像される。「編髪」「結髪」からもそのようなイメージが連想されるが、頭の上に編み上げるのではなく、お下げ髪のように頭の後ろに束ねていた様子も想像され得る。また「長髪」からは単に伸びるに任せていたような形も想像され得る。

A. A. Macdonell の *A Practical Sanskrit Dictionary* (Oxford) によれば、サンスクリット語の ‘jaṭā’ は「編んだ髪、お下げ髪（修行者、シヴァ、会葬者の身なりとしての）」という語義を与えられている。この語源は√jaṭ であると考えられるが、Monier-Williams の *A Sanskrit-English Dictionary* (Oxford) によれば、√jaṭ は√jhaṭ と同じであって、これは「糸や髪などをもつれさせる、からませる」という意味とされている。

パーリ語でも同じであって、Rhys Davids と Stede の *Pāli-English Dictionary* では ‘jaṭā’ には「もつれからまった髪、編んだ髪、修行者の身なりとしてのもつれた髪」という訳が与えられている。また ‘jaṭila’ には「編んだ髪、修行者の身なりとしてのもつれた髪」という訳が与えられている。また ‘jaṭila’ には「編んだ髪、修行者の身なりとしてのもつれた髪」という訳が与えられている。また ‘jaṭila’ には「編んだ髪、修行者の身なりとしてのもつれた髪」という訳が与えられている。また ‘jaṭila’ には「編んだ髪、修行者の身なりとしてのもつれた髪」という訳が与えられている。

現代のヒンディー語では ‘jaṭila’ には ‘adj. 1. tangled, matted (as hair) . 2. involved, coplicated’ という意味が与えられている。名詞として特定の「宗教者」を意味するような用法はないようである。

このように原語に与えられる訳語からは必ずしも特定のイメージを得ることはできない。

[1-2] *Jātaka* の散文部分には ‘jaṭamaṇḍalaṃ bandhitvā’ という言葉が見られる。後期聖典資料の〈21〉〈35〉〈38〉〈43〉〈45〉を参照されたい。これは「髪を束ねて輪とっていた」ことを意味するであろう。

〈45〉には「螺髻の間には黄金の針を刺し」という記述がある。髪を束ねて輪にするときに、針のようなものを使って留めたのであろう。

〈49〉には「与えた宝珠を螺髻中に載せた」という記述がある。「法華七喩」のうちの「髻珠喩」（『法華経』「安樂行品」）は「但髻中明珠不以與之」<sup>(1)</sup> (na punaḥ kasyacīc cūḍamaṇiṃ dadāti)<sup>(2)</sup> とされている。髻 (cūḍā) につけた宝珠 (maṇi) が「髻の中の宝珠」と訳されている。ここでは簡単には人に授けることができない「最勝のもの」が意味されているのであるが、頭の上で巻き貝のように髪を巻き上げ、髻（もとどり）にしたそのなかに宝珠を隠すことがイメージされたのであろう<sup>(3)</sup>。

また *Jātaka* 526 ‘Naḷinikā-j.’ (vol. V p.203) の中には一角仙人がカーシ国の王女に

誑かされるところで、彼女の髪形を「螺髻 (jaṭā) は2つの頭に形よく分かれている (dvedhāsiro sādhuviḥattarūpo)」〈偈〉と表現している。これは女性の髪形であるがおそらく頭の上で髪を丸めてそれを2つに整えるようなものも「螺髻」と呼ばれたのであろう。

[1-3] 原始聖典資料の〈6〉SN.004-003-001には‘jaṭaṇḍuvena’という用語が見られる。Margaret Coneの*A Dictionary of Pāli*では、‘aṇḍuva’にa roll (of cloth, etc) という訳語が与えられている。「巻き上げられた螺髻」ということになるであろうか。PTSの*Pāli-English Dictionary*には‘jaṭā-aṇḍuva(-andu?)’とされ、‘a chain of braided hair, a matted topknot’ という訳語が与えられている。この語源解釈が正しいとすれば‘andu’は「鎖」であるから、この意味を生かすとすると「螺髻の鎖」ということになるだろうか。あるいは著者は「三つ編みにした髪」「もつれた頭頂の髻」というような意味を表しているのかも知れない。

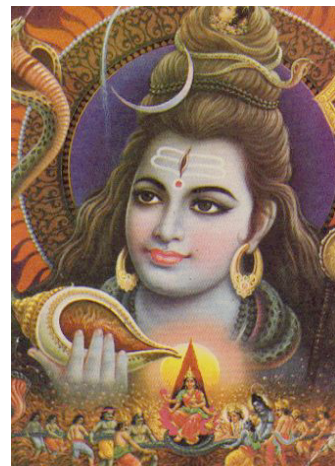
[1-4] 絵画や彫刻に描かれるシヴァ神像の頭髪部分はさまざまに表現されている。しかし一部分を脇に垂らしているものもあるが、すべて何らかの形に頭の上で高く束ねられている。現在のシク教徒は髪や髭を伸ばしてターバンの中に丸め込んでいる。少年たちは頭の上で髪を団子にして布で丸め込んでいる。これらからは髪をお下げ髪にしているのではなく、頭の上で丸めているというイメージが強い。右の写真はヒンドゥーギャラリー (<http://www.hindugallery.com/>) から利用させていただいたものである。



右はパールヴァティー

[1-5] 以上のようなことを考え合わせると、髪を長くして、これを頭の上でぐるぐる巻きにしてまとめる髪形を‘jaṭā’と呼び、このような髪形をする修行者を‘jaṭīla’あるいは‘jaṭin’ と称するのではないかと考えられる。

「法典」には髪形として‘jaṭā’と‘muṇḍa’ (禿頭) の外に‘śikhā’という言葉が出る。これはMacdonellでは‘lock or tuft of hair’ という意味が与えられ、Monier Williamsでは‘a tuft or lock of hair on the crown of the head, a crest, topknot, plume’ という意味が与えられている。後に紹介する「ダルマ・スートラ」の和訳では「頂髻」と訳されている。これもよくわからないが、髪を長くして頭の上でぐるぐる巻きにして留めるのが‘jaṭā’であるとすると、‘śikhā’はその他の髪形ということになる。頭を剃るというのではないから長髪だとすると、これは髪を垂らしてお下げ髪に纏めるような髪形ではないであろうか。伸びるにまかせてぼうぼうにする以外に、長髪を束ねる束ね方にはこれ以外に想像することは難しい。



[1-6] 以上のように多くのバラモンの修行者は螺髻にしていたと考えられる。しかしバラモンの修行者は必ずしも全てが螺髻にしていたわけではなかったようである。原始聖典の〈21〉にはバラモンのカッサパに対して、「魚肉を食べないことも、断食も、裸行 (naggiyam) も、禿頭 (muṇḍiyam) も、螺髻 (jaṭā) も、塵垢にまみれることも、粗い鹿皮の衣を着ることも、火への供養も、苦行も、真言も、祭祀も、犠牲も、季節の荒行も、疑惑を超えない人を浄めない」といわれている。ここからバラモンの修行者であって「禿頭」の者もあったことが知られる。

ともかく以上のように、原始仏教聖典におけるバラモンの修行者は一般的には「螺髻」が特徴であり、そこで「螺髻梵志」という漢訳語も成立するわけであるが、実際にはさまざまな姿形をしていた可能性もあることを指摘しておく。

- (1) 『法華経』「安樂行品」(大正09 p.038 下)
- (2) 南条・ケルン ‘Sukhavihāraparivarta’ (p.289 11行目)
- (3) 『起世因本経』(大正01 p.365 下)に次のような文章がある。「一切世間各隨業力現成此世。諸比丘。如此小千世界。猶如周羅。周羅者隋言髻也外國人頂上結少許長髮爲髻名千世界」という。これは小千世界が「周羅」のごとしというのに註がつけられたものである。「周羅」はパーリ語の ‘cūlā’、サンスクリット語の ‘cūḍā’ でPTSの *Pāli-English Dictionary* では ‘usually in sense of crest only, esp. denoting the lock of hair left on the crown of the head when the rest of the head is shaved’ と訳がつけられている。なお、cūḍāmaṇi は後世の説話文学などにおいては、髪型とは関係なく生まれつきに頭蓋に埋め込まれているかのように表象される場合もある。この宝珠をとりはずすことはその持ち主の死を意味する。例としては Maṇicūḍa の物語が挙げられる。Maṇicūḍa (菩薩) は人々の苦を除くためにその頭蓋から宝珠 (cūḍāmaṇi) をとって与えて死に、後に蘇生する (Kṣemendra の *Avadānakalpalatā* 3 の Maṇicūḍāvādāna)。カシミールの現存しない Bṛhatkathā の改作本 *Kathāsaritsāgara* 12,23 の Jimūtavāhana の物語では、Jimūtavāhana がガルダの犠牲になるべきナーガを助けるために身代わりとなって自身をガルダに食べさせるが、ガルダに運ばれる際に抜け落ちた頭の宝石 (śīroratna, śīromaṇi, cūḍāratna) が彼の妻に夫の身に起きた不幸を知らせる。その他、前生につんだ善業の異熟により頭に (śīrasi) 宝石 (maṇiratna) をつけて生まれてきた人物として、*Avadānaśataka* 69 の Sūrya がある。

[2] 螺髻梵志は髪の毛ばかりでなく、髭や体毛そして爪を伸びるにまかせていたようである。

[2-1] 原始聖典の〈5〉SN.003-002-001と〈20〉*Udāna*には、「7人の螺髻にした者 (jaṭila)、7人のニガンタの徒 (nigaṇṭha)、7人の裸行者 (acela)、7人の一衣者 (ekasāṭaka)、7人の遊行者 (paribbājaka) が脇の毛や爪や身体の毛を長くし (parūḷha-kaccha-nakha-loma)、1カーリ量の荷物を担いで (khārivividha) 通りすぎた」とされている。螺髻梵志のみならず、ニガンタの徒や裸行者、一衣者、遊行者が腋の毛や爪や体毛を長くしていたことが知られる。

[2-2] 後期聖典については次のようなものが見いだされる。〈1〉と〈7〉は爪と腋毛、〈16〉と〈37〉は鬚、〈31〉は鬚と胸や腹の毛を長くしていたとされる。

[3] 螺髻梵志は鹿の皮 (ajina) <sup>(1)</sup> で作った衣を着ていたようである。

[3-1] 原始聖典では〈6〉〈8〉〈16〉〈24〉に言及されている。『四分律』（大正 22 pp.784 上～785 下）の伝は釈尊の前生物語を含む。定光如来に会う場面では菩薩は五通仙人の弟子で弥却摩納とされているが、この摩納は 500 歳の間髪を解かず鹿皮衣を着ていたとされる。螺髻梵志がイメージされていたものと考えられる。

[3-2] 原始聖典の〈9〉『雑阿含』255 は「皮褐を衣る」とするのみであるから鹿皮に限定されない。〈11〉『雑阿含』1099 は「獣皮の衣」とする。

[3-3] 原始聖典の〈5〉SN.003-002-001 と〈20〉*Udāna* には、「7 人の螺髻にした者 (jaṭṭila)、7 人のニガンタの徒 (nigaṇṭha)、7 人の裸行者 (acela)、7 人の一衣者 (ekasāṭaka)、7 人の遊行者 (paribbājaka) が脇の毛や爪や身体の毛を長くし (parūḷha-kaccha-nakha-loma)、1 カーリ量の荷物を担いで (khārivividha) 通りすぎた」とされている。ここには「裸形にする者」「一衣を着る者」も登場するが、その属する宗教は明示されていない。普通に考えると、「螺髻にする者」はバラモンの修行者、「ニガンタの徒」と「裸形にする者」はジャイナ教の修行者、遊行者はバラモン教以外の沙門教の修行者を指すということになるが、「法典」によればバラモンの修行者が「裸形」になることも、「一衣」になることもあり、また四住期の第 4 期が「遊行期」と呼ばれるのであるから、これらも十分にバラモンの修行者を意味しうるということになる。ただし「ニガンタの徒」はあくまでも「ニガンタの徒」であって、バラモンの修行者であることはあるまい。したがって「螺髻にする者」も「裸形にする者」も「一衣を着る者」も「遊行者」も全てはバラモンの修行者を指すということもありうるわけで、それは彼らが「脇の毛や爪や身体の毛を長くし、1 カーリ量の荷物を担いで」いたとされることでも証明される。これは仏典では明らかに螺髻梵志の特徴であるからである。またここから見る限りでは、「ニガンタの徒」は仏教の沙門とは違って、バラモンの修行者と同じような格好をしていたということになるかも知れない。

〈21〉の *Suttanipāta* v.249 は「螺髻」と「粗い鹿皮の衣を着る」ことが、「禿頭」や「裸行」と並列されている。これはバラモンの家系に生まれたカッサパについて、そうすることがバラモンの務めである「清め」にはならないという教えであるから、明らかにバラモンの修行者として示されたものである。バラモンの修行者には「禿頭」とともに「裸行」の者があったことが知られる。〈4〉『中阿含』104 はさまざまな「沙門梵志の苦行」の一つとして述べられたものであるが、同じような趣旨で解することができる。

なおこの時代の宗教には六師外道が知られるが、ニガンタ以外の宗教は原始聖典では極めて影が薄く、それらがここに反映されているとは考えにくいことを付言しておく<sup>(2)</sup>。

[3-4] 後期聖典には、螺髻梵志が鹿皮の衣服を着けていたことがより明確にイメージされている。〈1〉〈5〉〈6〉〈7〉〈9〉〈16〉〈21〉〈24〉〈27〉〈28〉〈30〉〈34〉〈37〉〈38〉〈41〉〈42〉〈43〉〈44〉〈45〉を参照されたい。

[3-5] 後期聖典にも「鹿の皮」と限定せずに、単に「皮の衣」を着ていたとするものもある。〈12〉は「獣皮衣 (cammaka)」とし、〈46〉は「皮の衣を着て (cammāvāsi)」とする。

[3-6] 以上のように螺髻梵志は鹿の皮の衣を着ていたが、後期聖典資料の〈1〉〈5〉〈7〉はアパダーナであるが、これは「鹿の上着を着た人 (ajinuttaravāsin)」とし、また

〈6〉では「片方の肩に鹿皮をかけて (ekamsaṃ ajinaṃ katvā) 」いたとする。 *Jātaka* では〈42〉が「一方の肩には鹿の衣を着け (pārupitvā ajinaṃ ekamsaṃ) 」、〈21〉が「一方の肩には鹿の皮をかけ (ajinaṃ ekasmiṃ aṃse katvā) 」、〈38〉が「鹿の衣を一方の肩につけ (ajinacammaṃ ekamsagataṃ akāsi) 」、〈45〉が「鹿の皮を片方の肩にかけ (rajatamayaṃ ajinacammaṃ ekamsagataṃ) 」、〈43〉が「鹿皮の衣を肩にかけ (ajinaṃ aṃse katvā) 」とする。

一方、次項において述べるように彼らは「樹皮」の衣も着ていた。しかしこれは〈45〉の *Jātaka* 544 は「身体には内も上も赤い樹皮の衣を着 (antorattaṃ uparirattaṃ cīrakaṃ nivāsetvā) 」とし、〈38〉 *Jātaka* 522 と〈42〉 *Jātaka* 538 と〈43〉 *Jātaka* 540 は「赤い樹皮の衣を (rattavākacīraṃ) 下に着 (nivāsetvā) 、上に着て (pārupitvā) 」とし、〈21〉 *Jātaka* 066 は「赤い樹皮の衣を下と上に着 (rattavākamayaṃ nivāsanapārupanaṃ saṅṅhapetvā) 」とされる。‘nivāseti’ ‘pārupati’ がどのような着方かよくわからないが、少なくとも水野弘元著『パーリ語辞典』の‘nivāseti’には「內衣を着る」という訳語が与えられているし、〈45〉の‘anto’ ‘upari’ は明らかに「内」と「上」であり、したがってこれらは仏教の比丘の三衣のうち下衣 (antaravāsaka) と上衣 (uttarāsaṅga) に当たるのではないと思われる。下衣は腰巻きのようなもので、上衣は上半身を主に蔽うワンピースのようなものである。これに対して「鹿皮の衣」は仏教の大衣 (重衣 saṅghāṭi) にあたるもので、これはオーバーコートに相当するのではないであろうか。仏教では上衣は通肩に着ることもあり、偏袒に着ることもあるが、重衣は日本の僧侶も着る袈裟に相当するものであるから、普通は左肩にかけている。おそらくそれが「鹿皮の衣を一方の肩にかけ」という表現となったのであろう。

[3-7] 後期聖典資料にも長髪でありながら露形であった場合もあることが〈48〉から知られる。螺髻梵志がいつの場合も鹿皮、ないしは獣皮の衣を着ていたとはかぎらないことが確認される。バラモンの修行者が全て螺髻であったとは限らないと同様である。

- (1) ‘ajina’ は PTS の *Pāli-English Dictionary* では ‘the hide of the black antelope, worn as garment by ascetics’ と解説されている。
- (2) 原始仏教時代における六師外道の活動状況については稿を改めて論考する。

[4] 螺髻梵志たちはまた、樹皮の衣 (vākacīra) を着ていたようである。前項に記したように、これらは仏教の三衣のうちの下衣 (antaravāsaka) と上衣 (uttarāsaṅga) にあたるものと考えられる。

[4-1] 原始聖典資料には〈17〉がある。「草衣」を着ていたとするが、ここでは「髻剪髪」とするから髪が切られていたことになる。しかし *Dhammapada* は ‘jaṭā’ とし、異訳では「結髪」とするのであるから、誤訳であると解釈した。

[4-2] 後期聖典資料には次のようなものがある。〈3〉 〈7〉 〈8〉 〈9〉 〈12〉 〈16〉 〈19〉 〈21〉 〈38〉 〈39〉 〈42〉 〈43〉 〈45〉を参照されたい。

[4-3] 以上の記述の中には樹皮衣を ‘ratta’ と表現するものも多い。〈21〉 〈38〉 〈42〉 〈43〉 〈45〉がそうであり、全て *Jātaka* である。‘ratta’ は「染められた」「色をつけられた」、あるいは「赤色」の意味を持つ。赤く染められていたのであろう。「法典」では ‘kāṣāya’

(袈裟)とされ、これは「赤褐色」を意味するからこれに相応するのであろう。

[4-4] 螺髻梵志であったかどうかは限定できないが、当時のインドにおいて苦行の一環として樹皮や木の葉を衣にする修行者がいたことは、次のような経典からも知られる。

或有沙門梵志裸形無衣。或以手爲衣。或以葉爲衣。或以珠爲衣。『中阿含』018「師子經」（大正01 p.441下）

或有沙門梵志裸形無衣。或以手爲衣或以葉爲衣或以珠爲衣。『中阿含』104「優曇婆邏經」（大正01 p.592中）

或有沙門梵志。裸形無衣。或以手爲衣。或以葉爲衣。或以珠爲衣。『中阿含』174「受法經」（大正01 p.712上）

[4-5] 上記のように螺髻梵志は樹皮で作られた上衣と下衣を着ていた。これは赤く染められていたのかも知れない。しかし原始聖典にはこれに関する記述はなく、螺髻梵志に特定せず、樹皮で作った衣を着ていた宗教者があったことに言及するのみである。

[5] 螺髻梵志は身だしなみとしては、不潔で歯を磨かず、顔も頭も汚いとされている。

[5-1] 後期聖典資料に次のようなものがある。〈1〉は「爪も腋毛も伸びて、歯は汚れ（paṅkadanta）、頭は汚れ（rajassira）ていた」、〈30〉〈34〉は「歯は汚れ（paṅkadantā）、顔も汚い（dummukharūpā）」、〈44〉は「身は穢い（rummi）」としている。

〈33〉は悪口として言われたものであるが「不潔な歯をして頭は汚れている（paṅkadantā rajassirā）」としている。

[5-2] このように螺髻梵志には汚いというイメージもあったようである。髪も髭も爪も伸ばし放題に伸ばすという格好なら、歯も磨かず、顔も頭も汚いというのは自然な連想である。螺髻梵志たちが出家して、欲望に執着せず、仙人のような生活をするをを目指したのが、結果的にこのような風体になってしまったものかも知れない。

次の文章はその風体を描いたものであるが、上述してきた螺髻梵志の風体と相似しているということが出来るであろう。

時王出遊。與諸群臣十八部衆詣無憂園中。王既坐已問諸群臣。愚人今在何處可喚將來。

愚人盡至。王見愚人久在園中。衣被垢膩爪長髮亂。即勅群臣。將愚人去。沐浴新衣剪髮截甲。然後將來。來已與種種飲食。賜以財寶恣其所須。即勅愚人。汝等還家供養父母。

勤修家業莫復作賊。『五分律』（大正22 p.243中）

また『根本有部律』「雜事」（大正24 p.218下）には、牛臥という比丘が髭髪を長くして、上衣は破れ、下裙は汚れ、樹下に結跏趺坐していたとき、人々が鬼と間違えたので、釈尊は長髪を禁止されたとされている。

しかし「螺髻」という言葉には、この伸ばしたものを不潔でないように、それなりに整えるという手間がかけられているように感じられるし、後に述べるように、螺髻梵志たちは沐浴をしたというから、むしろ身ぎれいにするの方が尊重されたのではなかろうか。『四分律』の「仏伝」部分では、ウルヴェーラ・カッサパやその弟子たちは「淨衣」を尼蓮禪河の水に流したとすることは先に見た通りである。

いずれにしても、歯や顔・頭を汚くしている螺髻梵志というのは、後期聖典にしか見いだ

せず、悪口の中に含まれるものもあるから、これは放浪的生活をする螺髻梵志の特殊なケースとも考えられるが、実は「法典」にこれを裏付ける規定もあり、これについては【13】の[8]に紹介する。

[6] 螺髻梵志が身体に泥や灰を塗り、塵垢にまみれるとするものもある。

[6-1] 泥を塗っていたとするものは原始聖典資料では〈8〉〈9〉〈15〉〈21〉である。すべて姿形、形式だけでは清められないと批判されたもので、〈8〉〈15〉は「塗泥 (pañko)」とし、〈9〉は「灰全身」とし、〈15〉は「塵垢身 (rajo va jalla)」とし、〈21〉は「塵垢にまみれる (jallam)」とする。

[6-2] 後期聖典資料は〈7〉〈48〉で、〈7〉は「爪や腋毛を伸ばし、齒は汚く (pañkadanta)、頭を不潔にして (rajassira)」いて、そして「全身は塵や泥にまみれていた (rajojalladhara sabbe vasanti)」とし、〈48〉は「塗灰」も本当の修行ではないとするものの中に含まれたものである。

[6-3] 以上のように、ほとんどが螺髻梵志の身体に泥や灰を塗り、塵垢にまみれる修行が形式的で意味がないとされる文脈の中で語られたものである。ヴェーダの読誦や苦行、断食などの修行項目の中の一つとして述べられたものであるから、修行の一環としてこのようなことも意識的に行われたのかも知れないが、先にも述べたように螺髻梵志の放浪生活の結果としてそのようになったのかも知れない。